

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04707

研究課題名(和文) 初等教育課程における器楽教育カリキュラムの開発

研究課題名(英文) Developing a musical instrument activity program in elementary education

研究代表者

村上 康子 (MURAKAMI, Yasuko)

国立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：20458863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、(1)楽器を探索する、(2)聴覚フィードバックを用いながら音色を作り出すために自分の身体の使い方を考える、という2つの視点を持った初等教育における器楽活動プログラムの開発を試みたものである。実際の小学校音楽科の授業実践や実践者のインタビューから器楽活動の課題として、楽器の音色(ねいろ)に着目した実践が難しいことが明らかとなり、それが器楽教育の意義を損なっている可能性があることが指摘することができた。また、幼児教育における子どもと楽器とのかかわりと小学校における器楽指導とを比較・検討することで、幼児教育に根差した器楽活動の展開の重要性について明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、初等教育課程における器楽活動の意義について探り、初等教育課程における器楽教育カリキュラムを開発することであった。主な成果として(1)乳幼児期から児童期にかけて、実は楽器とのかかわりに大きな差が無いことを示した、(2)小学校教育の場で、楽器を探索し、楽器で奏でられる音色を探索することの重要性を示した、(3)学校教育における活動の根底に幼児教育の視点を持つことの重要性について明らかにした、という3点を挙げられる。これらの成果については、学会発表で公開している。

研究成果の概要(英文)：The aim of the research was to develop a musical instrument activity program in elementary education which had the following two perspectives: (1) exploring the instruments and (2) thinking about how to use one's own body to create timbre using auditory feedback. From conducting elementary school music classes and interviewing class instructors, it became clear that, as one of the issues of musical instrument activities, it was difficult to conduct classes which focused on the timbre of instruments, thus it could be pointed out that this may be diminishing the significance of musical instrument education. Furthermore, by comparing and examining the relationship between children and musical instruments in early childhood education and music instrument instruction in elementary schools, we were able to clarify the importance of developing musical instrument activities that are rooted in early childhood education.

研究分野：教育学

キーワード：教科教育 音楽 器楽

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の音楽科教育において、戦後大きな変貌を遂げたのが器楽活動である。特に近年、創作の活動や、我が国及び諸外国の様々な音楽を取り扱うことが学習指導要領に示されるようになり、身体楽器や電子楽器、和楽器や世界の諸民族の楽器の使用など、扱う教材、使用楽器の幅が広がられた。「多様な音楽のよさや美しさを味わう」という目的に合致する指導として器楽活動が果たす役割は大きい。しかし、「極限まで拡張した『広く浅い』器楽体験が、音楽や器楽との『深いかわり』を阻害する危険性を常に感じる必要がある(中地, 2006)」という指摘があるだけでなく、「純然とした器楽合奏や従来考えられてきた器楽の基礎基本とは異なる方向で」器楽の教材選択が行われている現状も明らかにされており(有本・根本・小島, 2010)、器楽活動そのものの意義を実感できるような活動の必要性も訴えられている。活動内容の精選を図らざるを得ない状況の中、学習指導要領に記載されている内容は拡充が図られており、学校現場では器楽活動そのものの意義が見失われつつあるといえるのではないだろうか。

その一方で、器楽活動については学校教育において必要な活動であるという前提の元、指導内容・指導方法に関する膨大な量の実践研究が蓄積されてきた。しかし、その前提となるはずの「器楽活動そのものの意義」について理論的な根拠が示されてきたとは言い難い。楽器の演奏は、元来、楽器から奏でられるいい音色を自らが判断し、いい音を作り出すために、自分自身が身体の使い方を思考する行為である。身体の使い方の微妙な変化に直結して音色が変化するからこそ、器楽活動では自分の感覚を研ぎ澄ます必要が生じる。近年、人工知能研究や発達心理研究では人が身の回りのモノや環境との関わりを通して自己を発達させることを指摘してきた。これを、小学校教育における器楽活動の意義の一つとして示すことができるのではないか。こうした課題意識から、初等教育課程における器楽活動の意義を示しつつ、その意義が保証されるような実践カリキュラムの構築を目指すべく、研究課題を設定した。

2. 研究の目的

本研究は、初等教育課程における器楽活動の意義について発達心理学研究、人工知能研究、脳科学等の関連領域の知見と小学校音楽科の授業観察から探り、初等教育課程における器楽教育カリキュラムを開発することを目的とする。開発する教育カリキュラムは、従来、学校教育で行われる器楽活動において、欠如していたと思われる以下の2点を特に重視したものとす。

- (1) 楽器を探索し、音の美しさを追及する活動を通して自己感覚を磨くという視点を持つこと
- (2) 楽器から奏でられる音そのものを判断し、いい音を作り出すために自分の身体の使い方を思考する「資質・能力」が育つカリキュラムであること

3. 研究の方法

- (1) これまで行われてきた、関連領域(発達心理研究・人工知能研究・脳科学等)の知見を整理し、器楽活動に関連する重要な理論を整理する。
- (2) 研究協力者の実施する授業の観察を行い、小学校教育で行われている器楽指導の実態を把握する。観察に際しては許可を得たうえでデジタルビデオカメラ及びフィールドメモによる記録を行う。
- (3) (1)(2)の成果をもとに、初等教育における器楽教育カリキュラムの視点を整理し、実践の理論的背景について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 関連領域の知見の整理

平成25年から28年度に科学研究費補助金を受け実施した「乳幼児期における器楽活動プログラムの構築」の基礎研究を応用しつつ、より小学校教育に寄せて関連領域の知見を整理した。本研究では特に下記の点に着目した。

人工知能研究では、モノを使うという行為は、実世界に働きかけ、相互作用を通して感覚刺激を作り出す行為であり、環境に影響を及ぼす行為であると指摘されてきた(Pfeifer & Bongard 2010)。この領域では身体を有するヒトであるがゆえに、何らかの行為ができること、行為の結果生じた環境の変化を学習することができること、こうした学習の結果発達が促されること、が示されている。また、脳科学の領域でも、体を動かしたときのダイナミックな感覚情報について、外の環境に向かうだけでなく、身体の中へも向っていることが示されており、それが、運動制御に必要なフィードバック情報だということが示されている(村田, 2009)。これら2つの理論を援用すれば、楽器を演奏するという行為は、楽器というモノを使い音を鳴らすことによって、感覚刺激を作り出す行為だといえる。ここでいう感覚刺激は聴覚刺激だけにとどまらない。感覚間相互作用を通して「モノ」を認識し「音」を発見していく。刺激と自己の身体感覚の内省を通して音を作り上げていく過程としてとらえることができる。

(2) 小学校教育における器楽活動

(1)の内容を踏まえ、小学校教諭へのインタビュー、そして、2年間にわたる小学校の授業観察を行った。インタビューでは、器楽活動の難しさについて、「器楽活動では正しい音を正し

いタイミングで出すことに時間が割かれ、表現の工夫に焦点化した実践でも強弱やアーティキュレーション等の違いを感じ取りながら演奏する学習に終始しがちで、表現に見合った音を探求したり、楽器そのものの良さを味わったりするのは難しい」という課題が明らかになった。

また、観察した授業の中では、器楽活動において、既存の楽曲を演奏するために必要な技術・知識の伝達が当然のことながら行われていた。しかし、子どもたちの姿を丁寧に見てみると、授業中、時には休み時間などに多様な方法で楽器とかかわっている。自由に楽器に触れられる環境にあれば、楽器の音からイメージを膨らませたり、楽器から跳ね返ってくる衝撃を実感したり、楽器の構造を捉えたりということを自然と行っていたのである。これらは乳幼児期の子どもにもよく見られる楽器とのかかわり、特に 楽器を探索し、聴覚フィードバックを用いながら自分の身体の使い方を思考する姿といえるだろう。このような表現をする子どもと、いわゆる音楽活動との橋渡しをどうするべきか考えていく必要があることも明らかになった。

さらに授業観察の中では授業時間内に上記のような楽器とのかかわりを保証する時間が取られており、これら子どもたちの経験をクラス全員で共有する時間も確保されていた。現場の教師がプリミティブな子どもの表現と、いわゆる楽器の演奏を結びつけるような指導方略を持っているということでもある。この視点を定着させ、その基礎の上に実際の演奏活動につなげていくことこそが、小学校における器楽活動のカリキュラムに求められる視点といえる。

(3) 初等教育における器楽教育カリキュラム

幼児はある日突然児童となるが、思考までもが急に变化するわけではない。乳幼児期の楽器とのかかわりの機微をそのまま児童期になっても持ち続けているのである。そう考えると、乳幼児期の子どもたちが行っていたような、楽器を探索する、そして、聴覚フィードバックを用いながら自分の身体の使い方を思考するという学びの方法を、小学校に入った途端別の学びに切り替えるのではなく、その楽器とのかかわり方を保証しつつ新たな学習内容を獲得できるよう促す必要があるといえよう。

既存の楽曲の演奏を念頭に置いた場合にも、身体全体を使った「楽器とのかかわり」の充実を図る必要があるのは当然のことである。しかし、一斉授業の場で、既存の楽曲を演奏するとなった場合には必要な知識・技術が多くあるため、指導の視点がそちらにシフトしがちである。しかし、「この楽器はこう演奏する」という概念で認識する前に、身体を通して（感覚を通しての/実感を伴った）楽器を理解するような時間が保証されることで、楽器とのかかわりが深まる部分も多い。さらに、他者の感じ方を共有することができればその学びの量は圧倒的に増えていく。この時間が楽器の特性を、触覚・視覚・聴覚からとらえる経験となり、「自己の身体感覚を内省する」ことにもつながる。この感覚こそが、音楽をつくる過程で最も重要になってくる。乳幼児期の遊びの延長線上にある、音楽文化とのかかわりを念頭に置いた「楽器とのかかわり」こそが、「楽器を弾く」とことと「自分の鳴らした音を捉えること」とを一体化させるのであり、学校教育における器楽活動にも求められるのだといえよう。

引用文献

Pfeifer, R. & Bongard, J. (2010) 『知能の原理 身体性に基づく構成論的アプローチ』 細田耕・石黒章夫訳 共立出版

有本真紀・根本愛子・小島千か(2010)「義務教育段階の器楽活動に関する調査」『音楽教育実践ジャーナル』第7巻2号, pp.48-62

中地雅之(2006)「戦後器楽教育の展開」音楽教育史学会編『戦後音楽教育60年』開成出版 pp.75-88

村田哲(2009)「脳の中にある身体」『ソーシャルブレインズ』東京大学出版会 pp.79-105

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小川容子, 石川眞佐江, 早川倫子, 村上康子, 山中和佳子, 伊野義博	4. 巻 48(2)
2. 論文標題 音色と向き合い, 音色と関わる器楽活動の探求(2) 小学校の授業実践から器楽活動における身体について考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 81-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.20614/jjomer.48.2_81	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石川眞佐江・村上康子	4. 巻 15
2. 論文標題 歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴 楽器へのアプローチの違いに着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 104-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.20614/jjomep.15.0_104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川容子, 早川倫子, 村上康子, 山中和佳子, 川田弘人	4. 巻 47(2)
2. 論文標題 音色と向き合い, 音色とかわる器楽活動の探求	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 94-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.20614/jjomer.47.2_94	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yasuko MURAKAMI
2. 発表標題 Consideration on instrumental activities in elementary school: From the perspective of continuity from early childhood education
3. 学会等名 12th Asia Pacific Symposium for Music (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊原小百合, 石川眞佐江, 村上康子, 丸山慎
2. 発表標題 子どもと楽器の関係を根本的に問い直す
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川容子, 石川眞佐江, 早川倫子, 村上康子, 山中和佳子, 伊野義博
2. 発表標題 音色と向き合い, 音色と関わる器楽活動の探求(2) 小学校の授業実践から器楽活動における身体について考える
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小川容子, 早川倫子, 村上康子, 山中和佳子, 川田弘人
2. 発表標題 音色と向き合い, 音色とかわる器楽活動の探求
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上康子・石川眞佐江・小佐川心子・鹿倉由衣・長井覚子・山中和佳子
2. 発表標題 保育における継続的なワークショップの試み 音楽にかかわる学びを中心に
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 市川恵・村上康子
2. 発表標題 Teaching strategy of music teachers
3. 学会等名 Pacific Rim Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石川眞佐江、村上康子
2. 発表標題 The Reaction of Young Children in Listening Activities: the Analysis of Verbal Expressions
3. 学会等名 International Society for Music Education: Early Childhood Music Education Seminar (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石川眞佐江、伊原小百合、岡田猛、木村充子、長谷川慎、村上康子
2. 発表標題 パネルディスカッション 音・モノ・身体 それって創造性？ -
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 有本真紀・阪井恵・津田正之編著，古山典子・長井覚子・村上康子ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 221
3. 書名 新版 教員養成課程 小学校音楽科教育法	

1. 著者名 日本音楽教育学会編, 今川恭子・有本真紀・加藤富美子・村上康子ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 247
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小川 容子 (Ogawa Yoko) (20283963)	岡山大学・教育学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	山中 和佳子 (Yamanaka Wakako) (20631873)	福岡教育大学・教育学部・准教授 (17101)	
研究分担者	早川 倫子 (Hayakawa Rinco) (60390241)	岡山大学・教育学研究科・准教授 (15301)	
研究分担者	石川 眞佐江 (Ishikawa Masae) (80436691)	静岡大学・教育学部・准教授 (13801)	
研究協力者	平野 次郎 (Hirano Jiro)	筑波大学附属小学校・教諭	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	菅野 稚子 (Kanno Wakako)	横浜市立笠間小学校・教諭	